

# 言葉との邂逅

『一木一草』 前田真三著 グラフィック社

## 永遠の一瞬

一枚の写真。

それは、我々に、言葉を語りかけてくる。

饒舌な言葉を発する写真。

寡黙な写真。

叫びが聞こえてくる写真。

温かい言葉を語る写真。

そうした写真の中で、ときに、

ただ一言を、静かに語りかけてくる写真がある。

ただ一言。

しかし、魂に届くような一言。

それを語りかけてくる写真がある。

ある。

前田真三の写真は、その一言を語りかけてくる。

あれは何年前であったか。

肉親を失い、悲しみという言葉

では表せない深い喪失感の中を

彷徨った日々。

ふと手に取った、写真集。

『一木一草』。

その写真集の中の一枚の写真

に目がとまった。その瞬間、胸

を衝く思いとともに、一つの言

葉が、心に浮かんだ。

永遠の一瞬。

それは、「一朵の白雲」と名づ

けられた写真であった。

水辺の草原。

夏の空に浮かぶ一朵の白い雲。

ただ、それだけの写真であった。

空に浮かぶ雲。

気ままな風に吹かれ、

どこへともなく流され、

いつか消えていく

儂い存在。

それは、この宇宙の

永遠の時間の流れから見れば、

儂い一瞬の出来事。

儂い一瞬の風景。

けれども、

この宇宙において、

同じ風景は

二度と、生まれてこない。

だから、それは、

永遠の一瞬。

なぜか、一つの言葉とともに、その思いが、心に浮かんできた。

前田真三の写真は、いつも静かに、ただ一言を語りかけてくる。

同じ写真集にある、「霜の朝」という写真。

冬。朝。霜の降りた山道。

一枚の枯葉が、そこにある。

「旅路の果て」という言葉が、心に浮かぶ。

一つの写真、一つの絵からも、

言葉が伝わってくる。

それもまた、言葉との邂逅。

なぜなら、たとえ文章であつても、一つの言葉と出会うとき、

それは実は、他者の言葉と出会う一瞬ではない。

それは、自分の心の奥深くの、

魂の声が聞こえてくる一瞬。

その一瞬を求め、書を読む。



田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表



# BOOK